

ミスターの思い出

貿易会社経営

丸山 忠生

令和7年6月3日、ヴェネチアからドーハ経由で18時間。鬱陶しい梅雨空の成田に着いて、自宅に戻ったのは午後10時過ぎ。荷物の整理は後回しにして、まずは10日ぶりの風呂につき、ビールを片手にテレビを点けてみると、「長嶋名誉監督が肺炎で亡くなった！」のニュースである。横に座っている妻に聞いてみると、「エーッ、知らなかったの！今日の早朝、号外も出たのよ。」とそっけない。

小学生の頃、立教大学から巨人に入団し、開幕戦で国鉄スワローズ（現ヤクルト）の金田正一投手からフルスイングの4打席連続三振、天覧試合での阪神村山投手からの劇的さよならホームランの雄姿が、今でもしっかりと映像で記憶に刻まれている。

中学生になってからは当時横浜に住んでいたので、後楽園は遠く、川崎球場は当時の太平洋ホエールズ（現横浜DeNAベイスターズ）のフランチヤイズ球場で、よく巨人戦が行われた。選手たちの守備練習や打撃練習を身近にみるため、友人たちと昼過ぎから弁当持ちでよく見に行ったものである。

ある巨人戦終了後、どのように侵入したか、バックネット裏の記者インタビュースペースに忍び込んで、長嶋の記者インタビューの様子を目の当たりにしたのである。憧れの長嶋選手が目の前に立っていて、その当時140センチほ

どであつたので、179センチの長嶋は聳え立っているようだった。色が限りなく白く、胸毛がユニフォームからちよつと出ていてひと際輝いていた姿を今でも思い出す。

中学では勿論、野球部に入り3番サードを目指すのであるが、運動神経も野球センスも上手のライバル同級生にポジションを取られ、外野で何とかレギュラーを維持した次第である。しかし、長嶋への憧れは変わらず、ロッカーは3番、入場口は3番口、くじ引きは3番と、何でも「3」を選んでいた。

それから40年、「わが巨人軍は永久に不滅です！」を最後に現役引退した長嶋は1975年巨人の監督となるが、残念ながら大いなる挫折を味わうことになる。

その後、野球人を離れ、文化人（？）になって、「ヘーイ、カール！」とオリンピックのレポーターなどをつとめていたが、13年の浪人生活後、1993年巨人監督として復帰してきた。そして1996年、最大11・5差をひっくり返し優勝したペナントレースを「メイク・ドラマ」と表現したのである。

その当時、世田谷九品仏に住んでいて、環状8号線にある「田園調布サウナ」（現在は無い）によく通っていた。11月のある平日の午後、海外出張帰りに「田園調布サウナ」に行ったのである。いつものように、まずサウナにとバスタオルを片手に大浴場に行くと、お客は全く皆無。それではと、ゆつくりとサウナのドアを開けると・・・色白の大柄な紳士が一人静かに座

っているのである。よく見ると、「我が憧れの！あの長嶋さん！」であつたのだ。「監督！メイク・ドラマ！おめでとうございます！」と、やや緊張気味で声を掛けさせてもらったところ、あの独特な高い調子の声で、「ヤーツ、どうもどうも・・・」。矢張り、異常な存在感とオーラを、バスタオルだけのお互い真っ裸でも、ひしひしと感じたのである。

その後も、「田園調布サウナ」で度々お会いすることもあつたが、最後はホテルオークラでの洋画家絹谷幸二指導によるワイン・ラベル・コラボレーションのパーティーで、タキシード姿の輝く長嶋さんにお会いしたのであるが、その1ヶ月後、脳梗塞で倒れてしまったのである。

冥土へのさよならホームー走り梅雨

酔宵子